小中学生サミット

山原の自然を体験

沖縄サミット KYUSHU-OKINAWA SUMMIT 2000

地元の児童・生徒が案内

【東・名護】「マングローブの根ってタコの足みたい」「ウミガメの子供は小さいんだね」―。「小中学生サミット in OKINAWA」（主催・県サミット推進県民会議）に参加している県内外の小、中学生八十四人は十三日、本島北部で亜熱帯の自然を体験した。参加者は東村慶佐次のマングローブ林と、名護市嘉陽のウミガメの放流を体験。地元の児童・生徒の説明を受けながら、やんばるの自然を満喫した。

ウミガメの子供を興味深く見つめる小中学生サミットの参加者＝名護市・嘉陽小学校前

マングローブ じっくり見学

東村慶佐次

東村慶佐次に到着した一行を案内したのは、選択理科の授業でマングローブの研究をしている有銘中学校の三年生六人。ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギの三種類の特徴を説明した後、与古田惟仁さんが「マングローブは世界的に絶滅の危機にある。もっと研究して保護活動につなげたい」と抱負を述べた。

その後、参加者は遊歩道を歩きながらマングローブ林を見学した。参加者は、マングローブの特徴である根や、根の間から出てくるカニなどの生物にカメラを向けていた。

北海道釧路市から参加した沢田大輔君（東中三年）は「根っこが地上に出ている植物を初めて見た」と話したものの、初体験の沖縄の日差しに「釧路はまだサクラも咲いていないのに…。暑すぎる」と、ばて気味の様子だった。

ウミガメよ 大きく育て

名護市で放流

名護市の嘉陽小学校前の砂浜では、同小児童のウミガメの放流に立ち会った。放流する子ガメは、同小児童が保護し育てた十五匹のタイマイ。津波美奈子さん（六年）が「私たちは、このカメたちを十カ月間育ててきました。元気よく海に帰れるよう応援してください」と呼び掛けた後、全員で子ガメの旅立ちを見送った。

「ウミガメが必死に海に向かう姿がかわいかった」と話すのは宮崎県の小島千秋さん（五十市中三年）。茨城県から来た山嵜知子さん（麻生小六年）は「頑張れって応援した。大きくなって元気に帰ってきてほしい」と笑顔を見せた。

琉球新報　2000年（平成12年）5月14日　日曜日

私たちが守る21世紀の地球

小中学生サミット開幕

沖縄サミット KYUSHU-OKINAWA SUMMIT 2000

環境テーマにきょう討論会　宣言も採択

沖縄サミットのプレ事業で、全国の小中学生の代表が集まって環境問題を考える「小中学生サミット in OKINAWA」（サミット推進県民会議主催、文部省共催）が十三日から三日間の日程で始まった。十四日には「二十一世紀の地球環境を考える」をテーマに討論会が行われる。初日は本島北部の自然体験学習に、県内外から百八十六人が参加。亜熱帯独特の豊かな自然に触れ、自然環境を守る大切さを学んだ。

自然体験学習では、名護市立嘉陽小学校に隣接する砂浜でウミガメ（タイマイ）を放流したり、国の天然記念物に指定されている東村慶佐次のマングローブ林を見学した。

放流したタイマイ十五匹（生後十カ月）は昨年七月に生まれたもの。嘉陽小は一九九一年から自然学習の一環でウミガメの飼育と放流に取り組んでおり、今回放流された十五匹も児童が育ててきた。

初めて見るウミガメを興味深そうにながめていた岩手県盛岡市立杜陵小の遠藤拓真君（六年）は「僕たち津川に毎年サケを放流している。動物を大切にする気持ちはどこでも同じだと思う」と語った。

東村のマングローブ林では、同村立有銘中の与古田惟仁君（三年）ら六人が、理科の授業で行ったマングローブの観察結果などを説明した。

二日目の十四日は午前九時から那覇市奥武山の県立武道館で討論会が開かれ、全国の代表が環境保護への取り組みについて発表や意見交換、最後にサミット宣言を採択する。

最終日の十五日、県外参加者は首里城などを見学、沖縄の歴史・文化を学ぶ。

大海原を目指すタイマイの子どもを見送る県内外の参加者たち＝名護市嘉陽